

戦略的創造研究推進事業

(社会技術研究開発)

平成30年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

研究開発プロジェクト

「農山漁村共同アトリエ群による
産業の再構築と多彩な生活景の醸成」

研究代表者 大沼 正寛
(東北工業大学大学院 教授)

目次

1. 研究開発の実施内容	2
1－1. プロジェクトの達成目標.....	2
1－2. ロジックモデル.....	8
1－3. 実施方法・内容.....	9
1－4. 研究開発結果・成果.....	23
2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	32
3. 研究開発実施体制.....	32
4. 研究開発実施者	34
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	35
5－1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	35
5－2. 論文発表.....	37
5－3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	37
5－4. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	38
5－5. 知財出願.....	38

1. 研究開発の実施内容

1-1. プロジェクトの達成目標

本プロジェクトでは、地域の資源・環境を活かして育まれた生業・景観に着目し、これを支える技術を「地技」と呼ぶ。地技を体現する「つくり手」に主眼を置きながら、これを商い届ける「つなぎ手」、利用する「つかい手」、資源循環や環境保全に協力する「ささえ手」の4者と相互関係性を再認識し、次世代を拓く「地技」と地域環境を評価・共創することが、SDGsに照らしても必要であると考え（図1）。

そこで「地域の資源・環境を活かす『地技』を通して価値を生み出す営み（生業・活動）の共創様態」を「共同アトリエ（CA: Co-atelier）」と定義して、その創出・育成を図る。また、地域生業を営む景観を「生業景（WS: Work-scape）」、生業景を包むくらしの風景を「生活景（LS: Life-scape）」と定義し、営みの成果・目標の一樣と位置づける。これらをふまえ、達成目標として以下の3点を挙げる。

I 農山漁村「共同アトリエ（CA: Co-atelier）」の実践事例創出とモデル提示

旧来の家内工業的な生業様態を「単アトリエ（単A: sole-atelier）」、連携・共創した様態をCAとすると、近代以前からの単Aが「地技」を育む一方、近代以降は同業者組合、工場制手工業／機械工業等によって上意下達的な地域産業が形成されてきたが、現在はいずれも疲弊している。残された地技を再評価しつつ、つくり手のみならず、多世代・異分野間で連携・共創するCAの取組みが有効と考えられる。その具現化のため、特定事例の創出・育成を図り、モデルの検討・提示を行う。

II コミュニティ・ネットワーク形成のための参集ツール開発

地技の世代間継承に特筆される「プレイヤーの多世代」や「活動・技術の多世代」は、CAの創出・育成における要点といえる。そこで、生業やWSの現場、共創への萌芽を情報収集するデータベースの構築を基軸に据え、PJの経過を伝えるブックレットの発行、WEB公開、プレイヤー相互の情報交換を行う「サミット&マルシェ」などをすすめる。また、若い世代や地域参入者向けの「地域資源再発見ツール」を開発する。これらの参集ツールを通じ、地域資源の再評価とCAの創出・交流や、地技の継承発展をめざすコミュニティ・ネットワークの形成に資することをめざす。

III 「生活景（LS: Life-scape）」の記録・マップ化

地場産の生糸、寒風の保存食、裏山から採掘した石屋根といった生業景や生活景は、地技の社会的価値を可視化する事象であり、つくり手／つかい手の利害関係を越えた「ささえ手」の存在意義にも帰着する。CA的な活動を取りまく背景には何があるのか、既往の町並み保存や文化的景観、伝統的工芸品、産業遺産といった施策を参照しながら、特定事例周辺の生活景を構成する資源・環境を点検し、研究開発における考察を深めていく。可能なものは記録動画に納めるなど、内外／多世代の人々が共有できる知見・情報とし、目標I・IIを支えるツールとしてマップ化する。

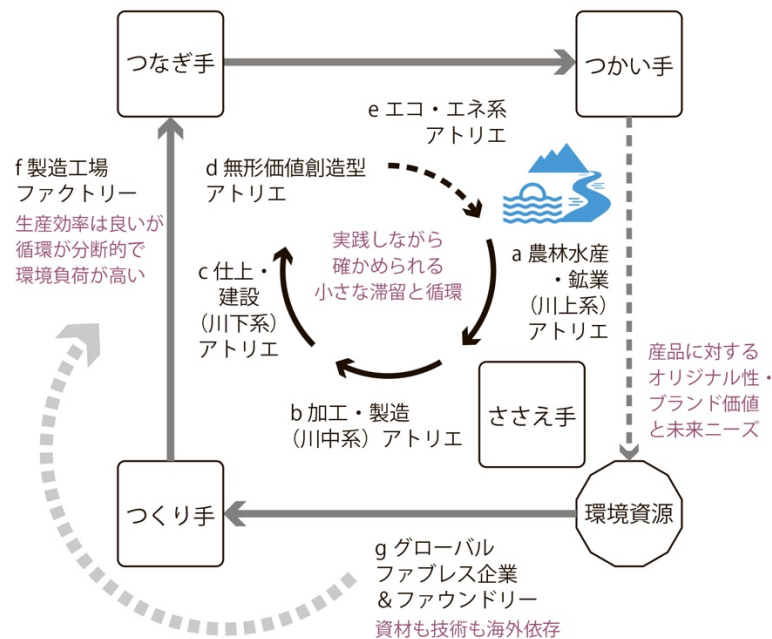


図1 小さな生業の再構築による多様な価値創出と資源・環境の循環・保全

（参考）プロジェクト達成目標の微修正について

平成29年度末・平成30年度当初までは、目標Ⅰ・Ⅲ（CA・LS）を同等の対概念・併存研究対象のように捉えて二大目標A・Bに据え、目標Ⅱ（連携）を最終目標として目標Cに据えて検討してきた。しかし、LS研究の一つと考えた特定PJ・スレート千軒講の取り組みも、共創様態づくりという意味ではCAの一例であるとともに、LSは研究開発による直接的な実装の対象としにくいことから、目標のⅠ・Ⅱをそれぞれ、CAの創出育成・後方支援（場づくり）とし、目標Ⅲは、Ⅰ・Ⅱを支えるものとして再定置することとした。

また、PJの目標を明確化するため、『地技』や、つくり手・つなぎ手・つかい手・ささえ手といった4者を概念キーワードに加え、SDGsにも照らしながら、目標の記述を修正した。

（1）全体目標およびリサーチ・クエスチョン

○本プロジェクトでは、地域資源を現代的観点から再評価し、次世代に向けて活用するとともに、断片化した動きを結びつけ、持続可能な地域産業の再構築基盤とすることを旨とする。このため、農業、鉱工業、建築、ものづくり、アートなど、「地域の資源・環境を活かす『地技』を通して価値を生み出す営み（生業・活動）の共創様態」を、地域立脚型のCAと定義して、実践事例の創出・育成を図る。

また、地技を通して価値を生み出す営みを包含する空間的事象として、地域生業を営む人々・環境からなる景観を「生業景」、生業景を包含する地域らしいくらしの風景を「生活景」と定義し、地技の成果が地域に還元されることを論じる基盤的概念として定義し、CAの創出・育成における地域立脚性の評価・検証に活かす。

○RQ1' 『地技』は、どこに、どんなものがあるのか？

（目標Ⅰ＋Ⅱ系統／2018年度RQ1）

- ・・・地域の資源・環境を活かし『地技』を通して価値を生み出す営み（生業・活動）は、農山漁村に今なお遺産として散在しており、資源としても未だ再生活用の余地を保持していると考えられるが、それはどこに、どんなものがあるのだろうか。そうした可能性を有した具体例は、東北地方においてはどんな特徴を有し、どのような分布状況として把握されるだろうか。

○RQ2' 『地技』は誰が担い、どのように共創が可能か？

（目標Ⅰ＋Ⅱ系統／2018年度RQ2+3+5）

- ・・・地域の資源・環境を活かす『地技』の担い手はどのような人々か。地域内外の人々による共創様態（＝CA）が、人材の発掘やエンパワメントの一方法となるのではないか。そうであるなら、どのような体制・プログラムが想定できるのか（加えて、そうした人々は、同質性よりは、世代や志向などにおいて多様性・相互補完性を重視してコミュニティ・ネットワークを形成するのではないか）。そしてこうした取り組みは、分散ネットワーク型の地域産業の萌芽につながるのではないか。

○RQ3' 『地技』は持続的な生活景とどのように関係づけられるか？

（目標Ⅲ系統／2018年度RQ4）

- ・・・地技は、地域の資源・環境の活用保全と不可分であり、それが持続可能性に通じるのではないか（つまり、地技の担い手の共通目標の一つには、生活景の持続・醸成が挙げられるのではないか）。地技を担う人々の意識と主体性は、自ら下草を刈り払い環境整備を怠らない、というような、生活景の要素点検によっても確かめられるのではないか。

（参考）リサーチ・クエスションの微修正について

平成29年度末・平成30年度当初までは、以下5点のRQを提示してきた。しかし、以下のRQ2, 3, 5は、いずれもCAの創出・育成・展開に関わるものであり、研究内容を明確に区分できるほど単純なものではないことに、年度内の活動を通して気づかされた。このため、それらを統合的にRQ2' として統合的に再定置し、残るRQ4（LS系）を新たなRQ3' として再定置することとした。

RQ1) 地域遺産の評価と資源としての活用可能性

RQ2) CAの可能性と共創プログラム

RQ3) CAの構成プレイヤー像と多世代共創状況

RQ4) LSの要素点検と持続可能性にむけた活用保全方策

RQ5) 小規模分散ネットワーク型の地域産業モデル

（2）平成30年度の目標

3つの特定プロジェクトを見定め、基盤的調査を進めた前年度を踏まえ、今年度は本調査とそれらの連携をめざしたサミット開催に結びつける前期と、それらを検証・再考・発信する後期に分け、以下の4目標を掲げた。

【目標1】 3大特定プロジェクトについて、取り組みの進捗・完成度合いを高める。

- ・衣（丸森柔和材）：活動・資材・空間の共有や、共同作品づくり等を進める。
- ・食（大崎保存食）：関係者の活動の共有等を進め、共創的活動の可能性を探る。
- ・住（陸前スレート）：集落ベースの屋根保全CAなど「千軒講」を実装させる。

【目標2】 事例データベースや地域資源再発見ツールの制作を行う

- ・P Jの趣旨に沿うCA事例と関連する事例を情報収集し、比較考察をすすめる。
- ・共同・教育・起業などを想定した地域資源再発見ツールを制作する。

〔目標3〕コアトリエサミットを開催し、アトリエ相互の連携に寄与する

- ・多様な取組みを情報共有する多彩な場として企画し、幅広く周知する。
- ・他団体とも連動し、ネットワーク構築をめざした双方向的なイベントとする。

〔目標4〕アトリエ共創や生業景・生活景に関する学術論文等を著す

- ・日本建築学会、日本デザイン学会等にそれぞれ報告を行いつつ、より高次の学術論文等をまとめることをめざす。

※上記4つの目標は、年度の当初と報告時とで文言の微修正を加えている。

(3) 背景

本研究開発領域では、都市・地域を、多世代・多様な人々が共にデザインしていくようなグッド・プラクティスを創出するとともに、そこでの知見を一般化・体系化し、問題に取り組む人々が活用できるような仕組みづくり、ステークホルダーが自立的に取り組みを継続し情報を共有できるような基盤的ネットワークを構築することをめざし、以下の3点を共通の目標としている。

(1) 持続可能な都市・地域のデザイン提示

(2) 多世代共創を促す仕組みづくり

(3) 統合的な成果の社会実装に向けたネットワーク構築

本研究開発P Jは、このうち(1)、とくに非都市地域のデザイン提示に深くかかわるテーマと考えられる。人口集中が進む都市社会における多世代の人々による共創社会のみならず、都市を支え、国土を保全する農山漁村地域における共創社会の構築も重要であることは論を待たない。そこで地域に根ざした生業に着目し、地域資源を活かした生業を現代的な観点から再構築して、その小さな営みを少しずつ連携、連動させようという構想・実践(プラクティス)に、本P Jの特徴がある。また(3)については、小さな生業の継承・再生、そして連携・連動することが目標であることから、プラクティスが実装に近づくこととで、いくばくかでも貢献できる可能性がある。すなわち関係の深い目標といえる。さらに(2)の多世代共創については、本P Jにおいては直接の目標というよりも、めざす持続可能な地域デザイン像における必要不可欠な社会構成であると捉えている。地域にねざした資源を活かす技とは、人の身体に宿る無形遺産に他ならず、その熟練の技を将来世代にどう活かすか、というテーマが、本P J全体に通底しているからである。以上をふまえ、類似・関連の先行研究や取り組みについて、以下の6例を挙げる。

i) 故・秋岡芳夫によるグループモノ・モノから東北裏作工芸への展開(1977-)。研究代表者が属する学部学科の前身である工業意匠学科長の学科長をつとめた秋岡が実践した動きである。日本の第一線で活躍しながら「立ち止まった工業デザイナー」といわれ、地域の資源を活かしたものづくりを復興させ、消費者から愛用者を育てようという実践的研究を行った。本P Jもその文脈を継承しているが、「工業化社会に対するアンチテーゼ」を「第一線のデザイナーが振り返る」という当時の構図はいかにも明快で、現代において模倣することはできない(そもそもメンバーは秋岡のような実力者ではない)。40年以上が経過した現代、地域社会を正視し小さな試みを連動させていくことが、むしろ重要で現代的とも考えられる。

ii) 温井亨「生活・生業の場としての歴史的風景保全の研究史に関する考察」(ランドスケープ研究64(5), 457-460, 2001)。生活・生業と景観の関係を主題としている点で注目される。本稿ではその嚆矢を大正期の建築学、今和次郎らに見出し、以後戦中・経済成長期には計画論や歴史学など分野別研究が中心で、その後町並み保全等への関心が1970年前後に高まり、生きている歴史的景観を研究と実践の両面から捉える複眼的研究は1980年以降によく現れる、としている。本研究を位置づけるうえで参照すべき点が少なくないが、あくまで俯瞰した研究であり、その対象や方法を直接参照・引用する先行研究ではない。

iii) 佐藤利明「地域社会形成の社会学・東北の地域開発と地域活性化」(南窓社・2007)。地方都市から農山漁村まで、東北各地の地域産業の現場がどんな歴史的背景をもち、どのように変容してきたかを俯瞰している近代東北産業史論である。具体例への聞取りも行われており、本P Jにおけるフィールド調査対象の参照例ともなり得る。ただ、同書は地域社会をマクロに観る視点がつよい印象がある。一方、本P Jは「生業景」のような現代的価値への新たな視点を提示しながら、計画・実装論を提示することをめざすものと位置づけられる。

iv) 伊藤正昭「新地域産業論・産業の地域化を求めて」(学文社・2011)。グローバルとヴァナキュラーという過去の対概念が、現代の産業社会再構築論においては統合的にとらえ得ること、さらには産地といわれる資源豊かな農山漁村に、一定の優位性があることを示唆している点で参考となる。都市型の工業集積地、それらとのネットワークをも論じており、本P Jの試みを再定置するうえで有用である。同書に依拠すると、本P Jの着目事例は、産業というよりは(社会的影響の小さな)生業に他ならないが、多様化し分断・分散した個々人が、過去の遺産を活用しながら生業を再構築するというミクロな動きに着目することで、地域資源と人間の営みの本来的なスケール感、持続可能性を考える一定の意義はあると考えられる。

v) 産業観光推進会議「産業観光の手法・企業と地域をどう活性化するか」(学芸出版社・2014)。景観に関連する既往研究の一つとして、昨今注目されている産業遺産を我が国においてどのように価値化するか、といった視点から、多くの事例・知見を総合化して、企画・運営の実情や提言を述べている書である。本P Jが着目している「生業景」に関連する視点も盛り込まれており参照に値するが、評価している「景」を観光産業のコンテンツに利用すること自体への内省はあまり感じられず、徹底してビギナー読者向けに分かりやすい例示を心掛けている。すなわち、現役の生業の継承再生を中心に据えながら、その「横顔」や「背中」を「背景(環境)」とともに「景」とみたてる本P Jの視点とは、異なる点も散見される。

vi) 西堀耕太郎「伝統の技を世界で売る方法」(学芸出版社・2018)。小さな生業にも可能性があるという勇気づけられる実録である。日吉屋という傘屋の家に生まれた著者は、世界を視野に、ものづくりと商売の可能性を痛快に論じる。とはいえ、多くの成功体験本がそうであるように、フォロワーが模倣すればよいかといえば、そうは考えられない。小さくとも企業の体をなし、一定のスピードで複製量産できる分野と、窮地に立たされた農山漁村の個々の生業は、状況が異なる場合も少なくない。少なくとも大学としては、成功目前の事例よりは、課題の多い事例に寄り添うべき責務があるといえよう。

なお、このほか東日本大震災後の復興プロジェクトや、東北の中核都市仙台にお

ける文化事業等においても参照すべき事例は少なくないが、本P Jの直接的な類似例は管見されていない。

1 - 2 . ロジックモデル

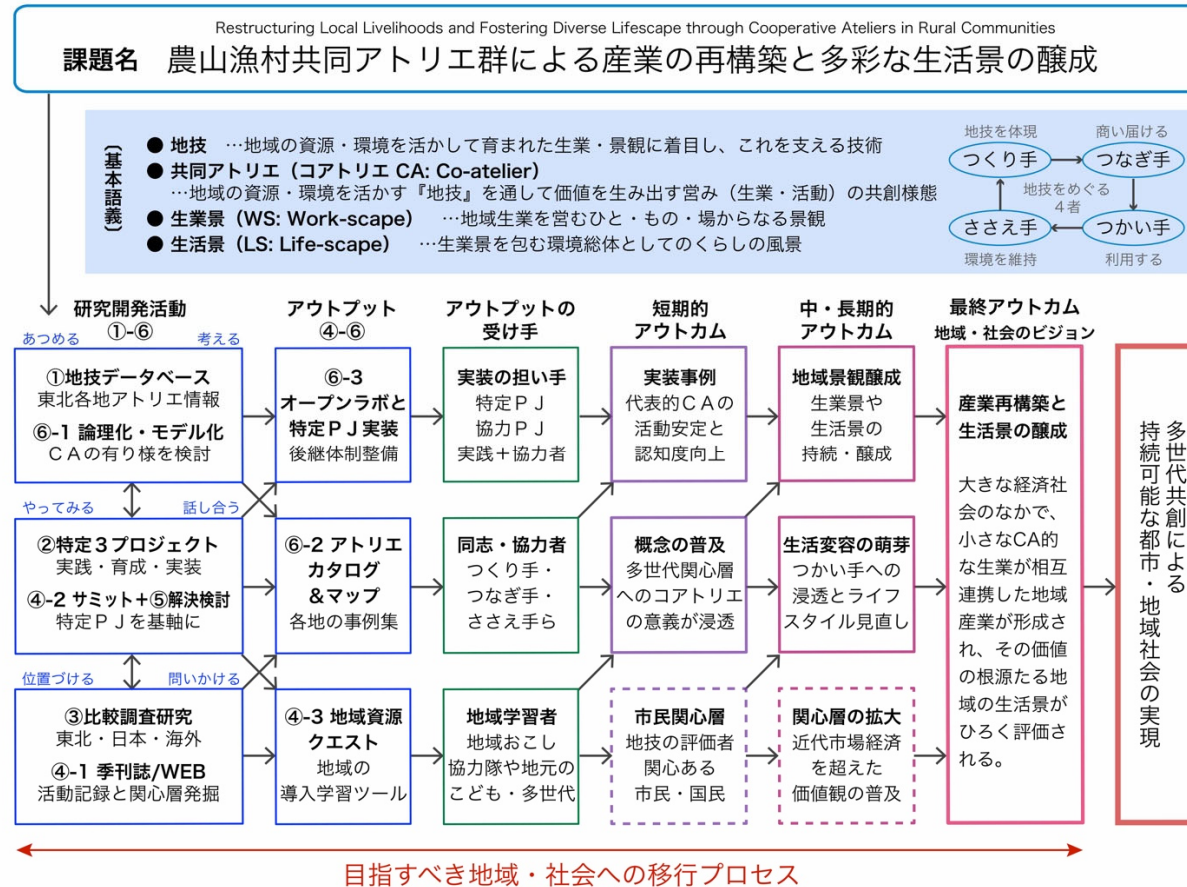


図 2 大沼 P J ・ 平成 30 年度ロジックモデル

1-3. 実施方法・内容

(1) 実施項目の全体像

本プロジェクトは次の7項目からなり、下図3のような相互関係・流れで構成する。

実施項目① 地技データベースの構築

実施項目② 特定プロジェクトの推進

- 1 丸森のシルクコアトリエと生業の自立連携
- 2 大崎の農・食をめぐる生業景の有機的連携
- 3 陸前の住文化を伝えるスレート千軒講

実施項目③ アトリエと共同に関する基礎概念検討と生業景をめぐる比較調査

実施項目④ 記録・会談・発信

- 1 季刊コアトリエ/WEBの編集と発信
- 2 コアトリエサミットの開催とアトリエ連携の推進
- 3 地技をとりまく地域資源クエストの開発

実施項目⑤ 課題解決ワークショップと理論化

実施項目⑥ コアトリエの理論・モデル提示とアウトプット

- 1 オープンラボと特定PJ+制作ツールによる後継活動計画
- 2 とうほくアトリエカタログ&マップによる地技と生業景の例示
- 3 地域資源クエストおよび既存ツールを用いた関心層の拡大化

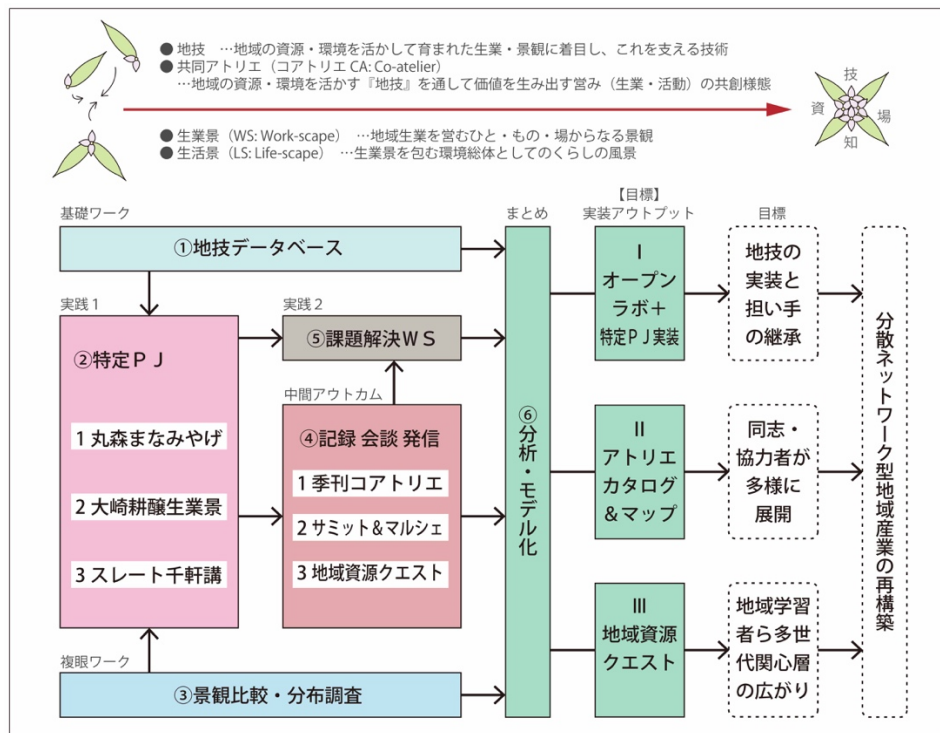


図3 大沼PJ・研究開発プロジェクト実施項目の全体図

(2) 各項目の実施内容

◆今年度の到達点(1) 特定プロジェクトの推進

〔目標1〕 3大特定プロジェクトについて、取組みの進捗・完成度合いを高める

○実施項目②-1 丸森のシルクコアトリエと生業の自立連携

+実施項目⑤-1 上記にかかる課題解決ワークショップと理論化

〈実施内容〉

＊丸森シルクコアトリエにおける新たな産品開発・生産

・・・和紙を織り込んだタペストリー&敷物、養蚕農家から譲り受けた出荷できない繭（今まで廃棄していたくず繭）を生かして織り上げたマフラーなど、作り手が主体的に共創に取り組み、H30年度の冬展・春展での出品に至った（図4）。

＊産品をもちよる「市」や情報発信ツール、生活環境資産調査

・・・産品をもちよる年3回のイベント「丸森まなみやげ 夏展／冬展／春展」を開催した（写真1, 2）。情報発信ツールについては、年度内にホームページ開設の方針を立てるに至った。環境資産調査については、丸森町の沿革と佐野地区の地織りの歩み、製糸工場の歴史を紐解くなど情報の深化を進めた。また周辺施設の全体像をも把握したうえで、共創空間の必要機能充足のため「共創テーブル&シェルフ」の必要に帰着し、小さな改修工事を実施した（写真3, 4）。

＊上記の経過のなかで、これまで協働してきた丸森コアトリエの参画者（主につくり手）のほか、4月には新潟県のある紡績メーカーからシルク製品づくりに関係した視察が来る、夏展では仙台市内で地場産シルクを扱う商社が視察に来るなど、小さな反響が重ねられてきている。

※変更点：年度当初は、上記特定PJを実施項目②-2としていたが、一般的概念である衣・食・住の語感に従って②-1に再定置した。



図4 丸森まなみやげ・蛇腹折リーフレット（2018年度版）



写真1 丸森2018夏展
(2018.8.11-12)



写真2 丸森2018冬展 機織り体験会
(2018.12.15-16)



写真3 日常使いの共創テーブル



写真4 イベント時は展示シェルフに

○実施項目②-2 大崎の農・食をめぐる生業景の有機的連携
+実施項目⑤-2 上記にかかる課題解決ワークショップと理論化
〈実施内容〉

＊大崎の農・食文化、景観資源および次世代活動に関わる調査・連携育成
・・・夏期・秋期に視察調査を行った。つくり手の代表格として「よっちゃん農場」の高橋博之氏、つなぎ手の代表格として「BLUEFARM Inc.」の早坂氏・高橋氏、「茶房クレイン」の小野寺氏らより、次世代へつなぐキーパーソンの構想と成果・課題を伺った（写真5, 6）。また大崎市内に残る景観資源としてK家住宅の見学を行い（写真7）、今後の活用可能性について談義した。さらに、よっちゃん農場高橋博之氏らが主催する農家の副業講座「工房ストローの藁細工ワークショップ」に参加し、高橋伸一氏の講話や博之氏らの構想を聞いた（写真8）。このエリアにおいては活躍するプレイヤーへの着目や、農業遺産を含む景観の多義性の考察を中心としていることから、課題の解決をめざす議論には進めていないが、課題そのものについては認識を同じくする点が少なくない。とくに、博之氏は「結局、自分たちが農業を継いでいるのは、この地域の風景を残し伝えるためである」と、当初より発言していることが注目される。なお、研究代表者は年度後半において、大崎市景観審議会の委員に就任している。

※変更点：年度当初は、上記特定PJを実施項目②-3 としていたが、一般的概念である衣・食・住の語感に従って②-2 に再定置した。



写真5 よっちゃん農場高橋氏聞き取り
(2018.7.6)



写真6 茶房クレインのコーラボ商品
(2018.10.18)



写真7 大崎市内のK家住宅(未活用)
(2018.10.19)



写真8 副業講座にて藁細工WS
(2018.12.5)

○実施項目②-3 陸前の住文化を伝えるスレート千軒講

＋実施項目⑤-3 上記にかかる課題解決ワークショップと理論化

〈実施内容〉

＊スレート千軒講エリア会議＋アカデミーの実施

・・・前年度に引き続き、エリアごとの会議や学習会、調査を進めた。

4箇所のうち被災した雄勝では、遺産群がもっとも残存する大須地区にて最古と目されるK家住宅の調査をしたほか、景観を語る学習会を開催した（写真9）。入谷では、WSを行ったコアメンバーとの談義を4月および翌3月に行い（写真10）、その間も同地区居住のスレート葺職人と度々調査等で共同した。登米では、景観まちづくりの講話を行ったほか、別事業にてスレート葺きの商家建築の活用デザインに協力し（写真11）、産業史を伝える民俗資料の記録調査計画も進めた。さらに陸前高田矢作では、5月に現地調査を行い、翌3月には雄勝大須で開かれた調査報告会にて住民を招き、地域間連携の素地をつくった（写真12）。このほか、国選定石盤葺技術者の佐々木信平氏が主催する技術講習会に協力するなど、つくり手・つかい手・ささえ手との反復的な連絡調整を進めてきている。その一方、新たな石材採掘には課題が山積しているうえ、現存するスレート民家については保全が目的でもあることから、スレート材そのものを流通させる目的ではない（資材販売のようなつなぎ手では本末転倒である）ことに鑑みた、価値保全のつなぎ手のあり方は、引

き続き課題といえる。

※変更点：年度当初は、上記特定PJを実施項目②-1としていたが、一般的概念である衣・食・住の語感に従って②-3に再定置した。



写真9 雄勝大須でのスレート学習会
(2018.6.30)



写真10 入谷での視察調査
(2018.4.21)



写真11 東北都市景観協議会@登米市
(2018.10.25)



写真12 矢作の住民らが雄勝を訪問
(2019.3.16)

◆今年度の到達点(2) データベース・学習ツール・モデル開発

〔目標2〕事例データベースや地域資源再発見ツールの制作を行う

○実施項目① 地技データベースの構築

＋実施項目③ アトリエと共同に関する基礎概念検討と生業景の比較調査
〈実施内容〉

＊事例収集にもとづく地技データベースの検討

・・・実地調査や文献・資料調査を通して、各地の事例収集に努め、一部は季刊コアトリエにて報じた。昨年度より試行錯誤してきたが、対象や情報項目の設定には紆余曲折がつづき、当年度末によりやくアトリエ情報のまとめ方について基本方針を見出した（1-4へ）。なお、前年度調査で不足していた青森（写真13,14）、岩手（写真15,16）、山形（写真17,18）方面にも視察領域を広げ、最終的にはそこで得た情報により、サミット&マルシェの出席依頼者を選考した。さらに、特定PJの進展につながる比較調査として、協力者阿部倫子氏による事例視察（写真19）や、近代建築の景観保全でつながる生業景・笠原タイルの産地調査（写真20）などを進めた。

※変更点：年度当初に実施項目「③-2 多世代共創コアトリエの事業運営形

態調査（宮城大）」「③-3 共同アトリエと景観デザインに関する研究（秋田公美大）」を掲げていたが、大学間で分担するよりも、共創をめざす意味で上記実施項目に統合すべき、との議論に至り、細目を省いた。所掌範囲が明確な④-3「再発見ツール開発」については、宮城大・秋田公美大を中心に進めることとした。



写真13 弘前「嶽きみ」農業と景観
(2018.6.15)



写真14 人気の嶽きみソフト
(2018.6.15)



写真15 被災者も共創、和ぐるみPJ
(2018.6.17)



写真16 くるみは衣食双方に活用
(2018.6.17)



写真17 国内2大現存製糸工場、松岡
(2018.6.14)



写真18 Samurai Silkは洋装で勝負
(2018.6.14)



写真19 りょうぜん天蚕の会 視察
(2018.12.13)



写真20 多治見タイル産業町調査
(2018.10.7)

○実施項目④-3 地技をとりまく地域資源クエストの開発（宮城大）

〈実施内容〉

＊ユーザーエクスペリエンスデザインの試作とワークショップ

・・・地域資源の利活用を検討する際に利用できるワークショップコンテンツとして設計し、コアトリエ形成のいわば「つなぎ手」（今回は主に地域おこし協力隊の地域学習を想定）を育成するためのツールであり、その有用性や課題を確認すべく、実装ワークショップを丸森町にて実施した（写真21, 22, 23, 24）。

＊WEBベースのツール開発

・・・ワークショップでの検討成果・課題をもとに、インターフェースを整えたコンテンツフォーマットとして画面制作を行った（図5）。これを

※当初は「地域資源ジャーニーマップ」と称していたが、日本建築学会、デザイン学会での識者との協議を経て、ジャーニーマップの既定概念と区別する必要に帰着し、上記名称とした。



写真21 グループに分かれてWS
(2018.9.26)



写真22 佐々木より進め方を概説
(2018.9.26)



写真23 想起と再発見の過程を記録
(2018.9.26)

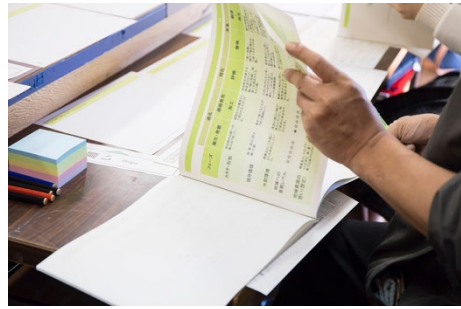


写真24 ツールの内容や表現を検証
(2018.9.26)



図5 地域資源クエスト（価値再発見WEBツール）の冒頭ページ
デザイン協力：吉田和樹・高橋結（宮城大学）

◆今年度の到達点(3) サミット&マルシェの開催

〔目標3〕コアトリエとうほくサミット&マルシェの開催（2018年9月1日実施）

○実施項目④-1：季刊コアトリエ/WEBの編集と発信

〈実施内容〉

＊季刊小冊子「コアトリエ」

- ・・・プロジェクトの記録、広報、発信を漸進的に進めるため、前年度に引き続き、季刊小冊子「コアトリエ」を6号から8号まで計3号制作発行した（図6, 7, 8）。また、WEB発信とも連動させた。なお、このうち7号は後述のサミット&マルシェに特化した内容とした。



図6 季刊コアトリエ 第6号（表紙）



図7 季刊コアトリエ 第7号（表紙）



図8 季刊コアトリエ 第8号（表紙）

○実施項目④-2：コアトリエサミットの開催とアトリエ連携の推進

〈実施内容〉

- *コアトリエとうほくサミット&マルシェ（せんだいメディアテーク他）
- ・・・PJの推進で知遇を得た多くのアトリエ群のなかから、多彩性に富んだ各分野の取り組みを持ち寄り、それぞれの成果や課題について話しあうサミットを開催するとともに（写真25, 26, 27, 28）、関心ある市民に向けてプレゼンテーションする場としてマルシェ会場も用意し（勾当台公園市民広場 LIVE+RALLY PARK, 写真29, 30）、この経過のなかで分野間・地域間での交流や連携の可能性を探る催しとした（図9）。サミットは、衣食住の各セッションと総括座談会に分けて終日かけて行い、ここでの討議経過はイラストを交えたグラフィックレコーディングなる手法にて記録した（図10, 11, 12, 13）。終了後は懇親の場をもち、以下の連携にもつながった。

*アトリエ連携の推進

- ・・・サミット&マルシェの会場では、屋根葺き職人の工具を野鍛冶師が修復する話が進んだり、後日に山林を管理する農家と養殖筏を欲する漁家との連携が模索されたりと、連携の萌芽が早くも生まれていた。

※連携企画について：日本建築学会大会（東北）の関連行事として開催された。催事の重複性がやや複雑となり、集客面では課題を残した面があ

るが、代表者が行事部会長を務めたことも関係し、会場となったせんだいメディアテークの設営等では学会関係者に協力頂く等のメリットも生まれた。



図9 コアトリエとうほくサミット&マルシェ 広報フライヤー
イラスト協力：齋藤寛子



写真25 セッション住 座談会登壇者



写真26 セッション衣 座談会登壇者



写真27 セッション住 座談会登壇者



写真28 総括座談会 登壇者, Adviser



写真29 マルシェ出展者の紹介



写真30 マルシェ体験コーナーにて

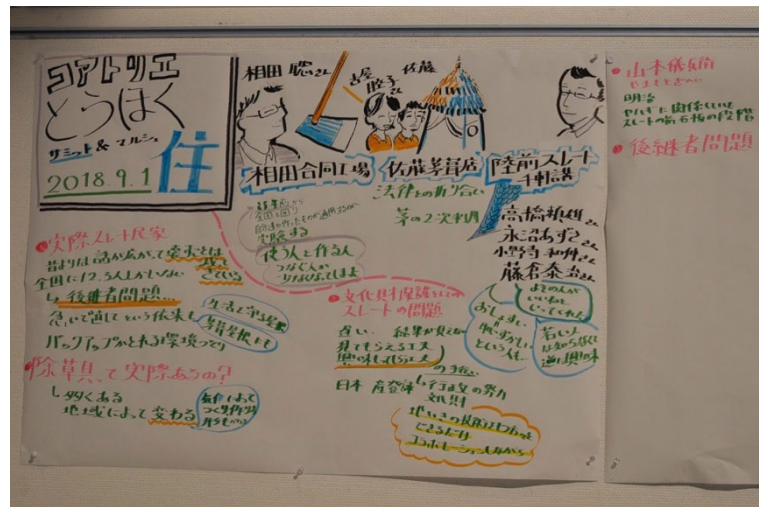


図10 サミット・セッション「住」のグラフィックレコーディング

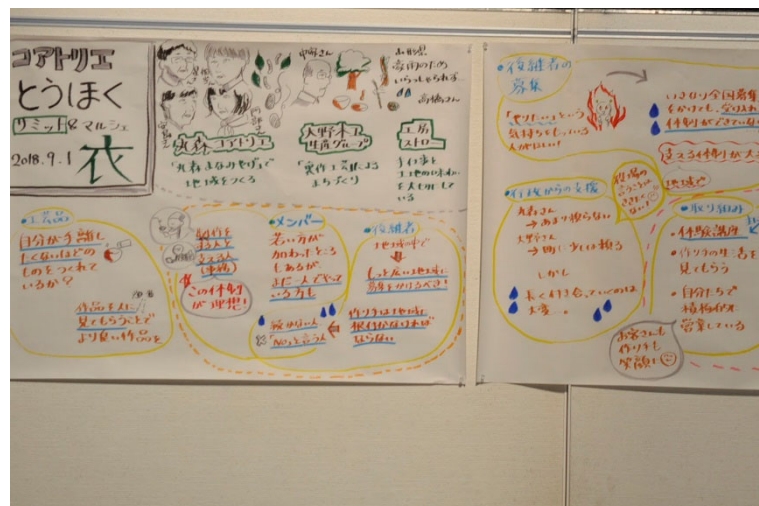


図11 サミット・セッション「衣」のグラフィックレコーディング

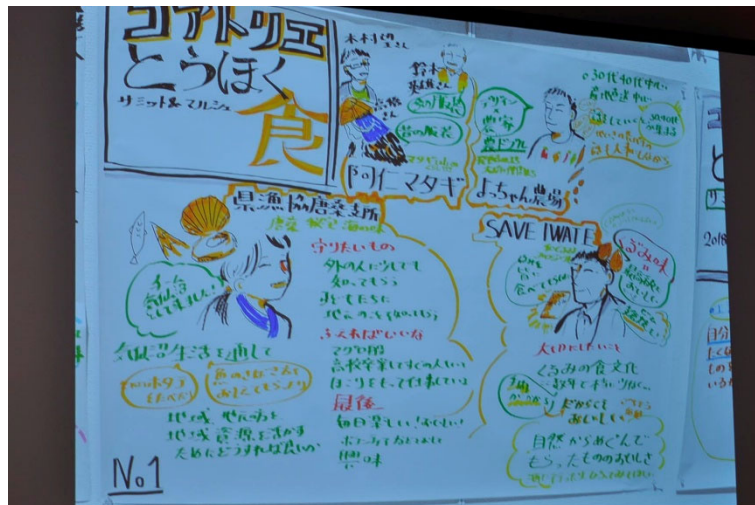


図12 サミット・セッション「食」のグラフィックレコーディング



図13 サミット「総括座談会」のグラフィックレコーディング

◆今年度の到達点(4) 論文等の執筆公開

〔目標4〕アトリエ共創や生業景・生活景に関する学术论文等を著す

〈実施内容〉

＊本年度中にまとめた論文等については5-2の通りであり、その概要としては以下の内容が主である。

- ・陸前スレートをめぐる建築史・景観保全に関する研究
- ・東北地方における手づくり市場に関する研究
- ・地域資源クエスト（旧名・地域資源ジャーニーマップ）に関する研究

1 - 4. 研究開発結果・成果

(1) 明らかになったこと

Q1. 『地技』は、どこに、どんなものがあるのか？

地域の資源・環境を活かして育まれた生業・景観を支える技術を「地技」とすると、農山漁村（非都市地域）には多種多様な地技が培われてきており、また、いまなお残されていると考えられ、本プロジェクトでは前年度より、東北地方において事例収集を進めてきた。平成30年度は、それらの多彩性に鑑みながらも、単にいろいろある、という話だけでなく、サミット&マルシェの計画に備え、どのように俯瞰し、どのように整理できるのかを討議・考察してきた。

その手がかりとして、衣食住あるいは明確な産業分類にもとづく「地技」探索と、地域の資源・環境に立脚した「地技」探索がある。一般的には前者によって分類するのが明快だが、本プロジェクトで採り上げる事例はこれに属さないものもあり、むしろ後者が特筆される面もある。すなわち地技が、衣食住といった各分野に限定されない場合がある、という意味である。このことを再確認したのは「コアトリエとうほくサミット&マルシェ」であった。例えば「陸前スレート」なる屋根外装石材は、もとは石盤や硯といった文具であったし、岩手盛岡にて健闘している「和ぐるみ」の利活用では、食品はもちろん、樹皮を用いたカゴの製作も併行して行われている。ひときわ目を引いた「阿仁マタギ」に至っては、森とともにどう暮らすかという「地技」であるから、衣食住を分けること自体がナンセンスである。だが、近年深刻化している農地の獣害を考慮すると過去の幻想ともいえず、自然界と人間界の現実的な共生バランスを取りもつ最前線に、地技の現代的展開が期待される面があるのである。

もちろん、近代産業の延長上にある分野別の取り組みも、数多く散在している。シルク産業はその代表例だが、産業が衰退し淘汰が進んだなかで、小さな町に養蚕農家が数軒残っていたり、2大製糸工場の一つが山形県庄内地方に残っていたりするの、ある種のしぶとさであろう。東北では依然、木材生産、漆などの特殊材料、大工技術、木工技術など山林資源と木工関連の生業において、しぶとく奮闘している現場がある。そもそも東北地方は米所であるが、元来は適地でない。他より早く着手した起源説を誇るよりも、継続が生んだ文化の深さが評価されるべきもの、ということもできよう。

一方、「地技」は「つくり手」論に終始し、これを活かす「つなぎ手」、そしてターゲットである「つかい手」への視点が不足しがちであることが課題である。これをブレイクスルーするには、地技を活かす「風技」ともいうべき「つなぎ手」の存在が重要となろう。サミット&マルシェ総括座談会の登壇者・早坂正年氏は「食やモノがあふれる現代において、美味しい、使いやすい、格好良いは当たり前であり、つかい手が一歩リードした価値を認めるのは物語である」と語る。このとき代表者らが立脚する建築学を援用するならば、物語の源泉の一端は「その地、その場」にあり、人々は「景」をもって場の価値を論じる、ともいえる。生業景、生活景を副次的テーマとしているのはこのためであり、上記早坂氏もまた、立脚地・宮城県大崎市をどう活かすかを最上位のテーマの一つに据えている。景の保全・醸成・改善には「ささえ手」が必要であるが、農山漁村においては、つくり手とささえ手が一致していることも多く、これが生業景の姿であろう。だがこれからは、つなぎ手、つかい手が、ささえ手

となることがあるだろうし、ここにもコアトリエ的共創のシーズが認められる。

以上のことを念頭におきながら、アトリエの様態が一目で分かるアイコンを作成した(図14)。赤がつくり手、青がつなぎ手を示しており、大きさは企業・団体の規模を示し、中心部の丸印がメンバーを指している。ここには屋号・社名が記されると同時に、製品・作品を成立させる技術、元となる資材、立地といった情報が記され、専業度や伝承度、地域活動への参画度などを自己評価できるようになっている。具体的には、例えば「和ぐるみプロジェクト」は、「拾い手」「剥き手」といった赤色アイコンのアトリエと共創する「つなぎ手」(青色)が主宰運営する活動である、と説明でき、成果物としてのクルミ食品の写真に関係したアトリエ群のアイコンを併記することで、どのような人々の共創が当該製品を生み出したのかが瞭然となる。

さらに検討すべき点としては、提示したアイコン表現を活かしながらも、上記のように個々の地技の整理にあたって製品・作品を基軸とするものでよいか、アトリエ様態を基軸とすべきか、など、最終的なアウトプットイメージの確定が急務となっている。最終年度にかけてこの点を明らかにし、整理したい。

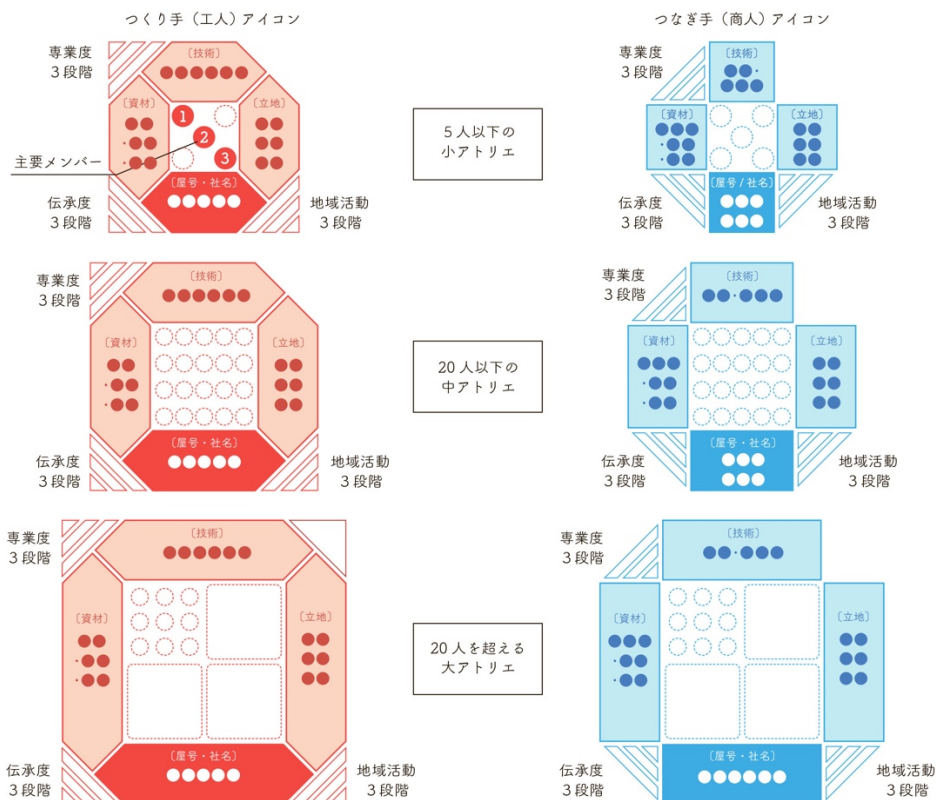


図14 アトリエ事例集等に用いる「つくり手」「つなぎ手」のアイコン描画例

Q2. 『地技』は誰が担い、どのように共創が可能か？

本プロジェクトで関心を寄せている事例の多くは、地域で長い時間をかけて培われた「地技」を身につけているのはしばしば高齢者で、これを若手が継承する、というモデルが少なくない。だが、地技が固定的で閉鎖的であるほど、継承の担い手が現れない、という状況もある。これに対して、多世代共創なる当領域の概念が有効なのは、先例側を優勢とみるのではなく、異なる世代間を平等に考えたうえで、不足点を

互いに補う考えにもとづくからともいえる。

もちろん、地技が技術・技能である以上、長期間にわたって磨くことで優位性が生まれることは当然である。だが重要なのは、その地技の価値や魅力が次世代に届くか、という点であろう。例えば、サミット&マルシェ「セッション衣」において集中豪雨被害で登壇が叶わなかったストロー工房の高橋氏は、山形県下で薫細工の最高名人とされる高齢職人のもとで手技を身につける一方で、現代生活にも映える素材の妙味を上手く引き出すことによって、工芸分野で新しい風を吹き込んでいる。しかもそれは農業の副業として実践しており、これを学ぼうと宮城県大崎市の農家の方々が講習会を企画するに至った。このように、地技と、これを活かそうという新しい志の双方が同居するとき、多世代共創による現代的価値の創出が実現する。そして、そうした人々が新たなコミュニティやネットワークを形成しているのである。

今年度は、そのきっかけの一つともなる「手づくり市場」に注目し、その広がりや特徴について考察を深めた。表1は、東北地方の主な手づくり市場68件のリストである。なかでも、仙台市内で10年以上続いている定期的な手づくり市場に着目すると、そこでの出展者や主催者は、持続可能な利益の確保を尊重しながらも、むしろコミュニティづくりに価値を置いて出展している人々が少なくないことが分かった。単に販売と収益であれば、ネット販売が高効率かもしれないが、つくり手も、つかい手も、つなぎ手も、東北の手づくり品に価値を置いている時点で現物確認を重視するから、ネットが通用しない面があるという。また、深い付き合いとは別の、なんとなく好みや価値観を共有できる「顔見知り」ともいえるゆるやかな人々の輪のなかに身を置く楽しさや、思わぬ「同志」に遭遇する期待感もあるという。

そこで、この手づくり市場研究とコミュニティ、ネットワークなどといった概念を整理したものが図15である。コミュニティとネットワークは本来、地縁性の有無において対置される人間関係といえる。ここで、手づくり市場研究で得られた「同志」

「顔見知り」なる人間関係を直交軸においてみると、同質性と多様性、地縁性と遭遇性といった性質に、それぞれの人間関係用語が位置づけられることがわかる。そして、つくり手やささえ手は、比較的コミュニティ論に近い領域で活動することが多いのに対し、つなぎ手、そしてつかい手は一般的に、不特定多数に向けて商うことも含めて、ネットワーク論に近い領域で活動することが多い。

地技の継承や新展開を考えると、こうした人間関係の構図のなかで、どこに可能性や課題があるかを考慮し、誰とどのように共創することができるかを検討することには一定の意義があると考えられる。本PJにおける多世代共創論は、こうした人間関係論のなかで考察を深めていくことが必要といえるだろう。

表1 東北地方の主な手づくり市場

No.	都道府県	市区町村	名称	併設 タイプ	性格 タイプ	出展 募集数	出店規模	空間形態	出展料 (単位:円)	市区町村別人口 (単位:人)	人口集中地区 (DID)の該当
1	青森県	板柳町	クラフト小径	公共施設	祭事的	200	超規模	c.歩道型	8000	14,079	×
2	青森県	青森市	青森クラフトフェアA-line	商業施設	祭事的	120	大規模	b'広場型+歩道型	6500	287,800	×
3	青森県	弘前市	津軽森	公共施設	祭事的	160	大規模	b.広場型	10000	174,134	×
4	青森県	五所川原市	アートクラフト展・あじ彩	公共施設	祭事的	100	中規模	c.歩道型	3000	56,148	○
5	青森県	八戸市	はっち市	公共施設	祭事的	90	中規模	a.屋内施設型	6000	233,070	○
6	青森県	弘前市	ひろさきアートマルシェ	公共施設	祭事的	80	中規模		2000	174,134	○
7	青森県	田子町	タブコブマルシェ	文化財	祭事的	50	小規模		3000	5,769	×
8	青森県	青森市	夏の工芸学校	公共施設	祭事的	30	小規模		6500	287,800	○
9	青森県	黒石市	こでんてん 手しごとアート展	街路	祭事的	28	小規模	c.歩道型	10000	34,341	○
10	青森県	平内町	樽山クラフトキャンプ	公共施設	祭事的	50	小規模		2000	11,402	×
11	秋田県	秋田市	秋田アートクラフト市	商業施設	祭事的	60	大規模	a.屋内施設型	8000	313,444	○
12	秋田県	横手市	よこてお城山クラフトフェア	公共施設	祭事的	115	大規模		6000	92,422	○
13	秋田県	横手市	秋田ふるさと村アート&クラフトフェア	公共施設	祭事的	100	中規模	a.屋内施設型	10000	92,422	○
14	秋田県	仙北市	あきた芸術村 手創る市	商業施設	祭事的	61	中規模		3000	27,338	×
15	秋田県	にかほ市	にかほとクラフト市	公共施設	祭事的	60	中規模		3000	25,385	○
16	秋田県	仙北市	秋彩こみちinかくのたて	公共施設	祭事的	60	中規模	c.歩道型	8000	27,338	×
17	秋田県	大仙市	秋田手作りマーケット カラフルdays	公共施設	祭事的	30	小規模	a.屋内施設型	3000	83,578	×
18	秋田県	仙北市	仙北は♥あーと展	商業施設	祭事的	30	小規模		1000	27,338	×
19	秋田県	大仙市	大曲手作り雑貨マーケット	公共施設	祭事的	30	小規模		1500	83,578	○
20	秋田県	仙北市	たざわこクラフト市	公共施設	祭事的	120	大規模		4000	27,338	×
21	岩手県	滝沢市	チャグチャグ馬コの里・工房フェスタ	商業施設	祭事的	150	大規模	b'広場型+歩道型	4000	55,113	×
22	岩手県	花巻市	アート&クラフト@土曜マーケット	街路	祭事的	320	超規模	d.街路型	5000	97,402	×
23	岩手県	金ケ崎町	グリーン・スマイル・フェスティバル	商業施設	祭事的	100	中規模		5000	15,850	×
24	岩手県	岩泉町	いわいずみ手仕事市	街路	祭事的	80	中規模	c.歩道型	3000	9,736	×
25	岩手県	盛岡市	手づくり市“てどらんご”	文化財	祭事的	70	中規模	c.歩道型	3500	292,014	○
26	岩手県	北上市	夏油てしごと市・新緑まつり	商業施設	祭事的	69	中規模		3500	93,088	×
27	岩手県	花巻市	花巻温泉商店街ストリート クラフト市	街路	祭事的	65	中規模	d.商店街型	5000	97,402	×
28	岩手県	一関市	花泉互市(春・秋)	街路	祭事的	60	中規模			28,098	×
29	岩手県	雫石町	どんぐりコロコロCRAFT市	商業施設	祭事的	50	小規模	b.広場型	9000	28,098	×
30	岩手県	一関市	一関ハンドクラフト展	公共施設	祭事的	40	小規模	a.屋内施設型	10000	17,094	○
31	岩手県	北上市	夏油てしごと市	商業施設	祭事的	40	小規模		3500	93,008	×
32	岩手県	紫波町	ボラーノまつり	商業施設	祭事的	36	小規模		8000	33,314	×
33	宮城県	仙台市	定禅寺ストリート 杜の都のアート展	街路	祭事的	200	超規模	c.歩道型	1000	1,053,717	○
34	宮城県	仙台市	earth day tohoku	公共施設	祭事的	114	大規模	b.広場型	5000	1,053,717	○
35	宮城県	仙台市	Smileマルシェ	商業施設	祭事的	110	大規模		4000	1,053,717	○
36	宮城県	仙台市	Hand Art Marche	商業施設	祭事的	100	中規模	a.屋内施設型	7200	1,053,717	○
37	宮城県	仙台市	まちくるマルシェ	商業施設	祭事的	100	中規模		4880	1,053,717	○
38	宮城県	仙台市	手ん店 あきクラフトフェア	商業施設	祭事的	100	中規模		2000	1,053,717	○
39	宮城県	仙台市	お薬師さんの手づくり市	文化財	日常的	130	大規模	b.広場型	4200	1,053,717	○
40	宮城県	仙台市	ハハノワ	公共施設	祭事的	80	中規模		1500	1,053,717	○
41	宮城県	仙台市	新寺こみち市	街路	日常的	80	中規模	c.歩道型	4200	1,053,717	○
42	宮城県	仙台市	杜の都のクラフトフェア	街路	祭事的	70	中規模	d.商店街型	8000	1,053,717	○
43	宮城県	仙台市	秋保ハンドメイドデント村	商業施設	祭事的	50	小規模	b.広場型	2100	1,053,717	○
44	宮城県	蔵王町	宮城蔵王クラフトフェア	公共施設	祭事的	75	中規模	c.歩道型	8000	12,409	×
45	宮城県	加美町	加美マルシェ	公共施設	祭事的	30	小規模		2000	24,071	○
46	宮城県	仙台市	荒井ないうろマルシェ	商業施設	日常的	20	小規模	a.屋内施設型	1000	1,053,717	○
47	宮城県	柴田町	しばた匠まつり	公共施設	祭事的	60	中規模		7000	38,015	○
48	山形県	鶴岡市	こしゃってマルシェ	公共施設	祭事的	20	小規模	b.広場型	3000	129,323	×
49	山形県	山形市	七日町クラフト天国	街路	祭事的	180	超規模		3000	248,047	○
50	山形県	鶴岡市	鶴岡クラフト・フェアin小真木原	公共施設	祭事的	150	大規模	b'広場型+歩道型	8500	129,323	○
51	山形県	新庄市	kitokitoマルシェ	文化財	祭事的	100	中規模		3000	36,463	○
52	山形県	山形市	みはらしクラフトミュージアム	公共施設	日常的	100	中規模		1500	248,047	○
53	山形県	山形市	山形クラフトフェアinビッグウイング	商業施設	祭事的	80	中規模	b.広場型	10000	248,047	○
54	山形県	遊佐町	クラフト・フェスタ島	商業施設	祭事的	60	中規模		8500	14,260	×
55	山形県	東根市	手づくりたんとマルシェ	公共施設	祭事的	60	中規模		4000	47,476	○
56	山形県	山形市	MONOMONOマルシェ	商業施設	祭事的	50	小規模		3000	248,047	○
57	山形県	酒田市	まつやま大手門くらふとフェア	文化財	祭事的	120	大規模	b.広場型	6000	129,323	×
58	山形県	寒河江市	寒河江の 野の市 のの市	公共施設	祭事的	75	中規模	b.広場型	5000	41,541	×
59	山形県	酒田市	中町わくわくマーケット	街路	祭事的	30	小規模		2000	129,323	○
60	山形県	山形市	みはらし手しごとマルシェ	公共施設	祭事的	20	小規模	b.広場型		248,047	○
61	山形県	寒河江市	さがえクラフトフェア「てとて市」	公共施設	祭事的	40	小規模		5000	41,541	○
62	福島県	南相馬市	みなみそうまのづくりフェア	公共施設	祭事的	30	小規模	b.広場型	0	62,270	○
63	福島県	福島市	福島空港ハンドメイドマーケット ソライチ	公共施設	祭事的	120	大規模		8000	282,184	×
64	福島県	郡山市	ふくしま手づくりマルシェin郡山	公共施設	祭事的	60	中規模		4000	326,088	○
65	福島県	福島市	あつまTeshi-got市場	公共施設	祭事的	100	小規模	c.歩道型	9000	282,184	×
66	福島県	三島町	ふるさと会津工人まつり	公共施設	祭事的	160	超規模	b.広場型	10000	1,689	×
67	福島県	伊達市	モノ作りびとフェアinつきだて花工房	公共施設	祭事的	50	小規模		7800	61,945	×
68	福島県	福島市	ふくしま手づくりマルシェ	商業施設	祭事的	47	小規模	c.歩道型	11000	282,184	×

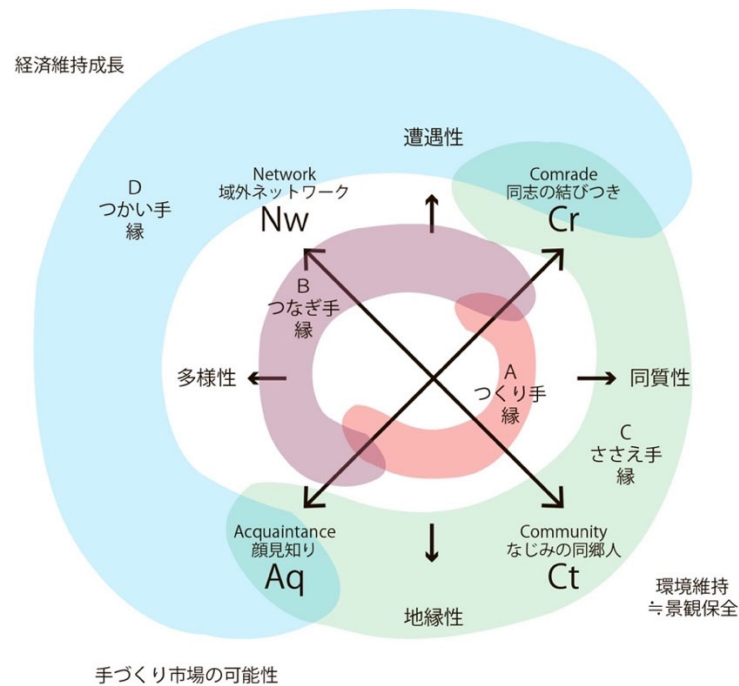


図15 地技をめぐるコミュニティ／ネットワーク／同志／顔見知りの関係性

Q3. 『地技』は持続的な生活景にどのように反映されるのか？

地技は、地域の資源・環境の活用保全と不可分であるから、地技の担い手の共通目標の一つには、生活景の持続・醸成が挙げられるのではないかと、というのが研究着手時の仮説であった。これまでの本P Jの取り組みを通して、このことは度々確かめられつつあるが、同様のことを明言しているのは、特定P Jにおける大崎市の高橋氏や早坂氏である。なぜ手間のかかる農業を継いだのか、それは風景を伝えるためであるという。だから、自ら下草を刈り払い環境整備を怠らない。

では、具体的に、どのように地技が生活景に反映されるのか。これについては、まさに「資源・環境」「生業景」「手入れ」が主要な3要素であると考えられる。資源・環境は、まさに土地の地味や素材のことであるから、その様相は直接風景に反映される。また、これを活かした生業と、営む人々の姿、表情がそのまま景観の主役となることも必然である。そして、自己の所有領域に限らない「環境への手入れ」は、その思いに対する一つの尺度となる面はあるだろう。このことから、上述のアトリエアイコンには、地域活動参画度に関する自己評価段階の記入箇所を設けている。

(2) 各項目の成果

◆今年度の到達点(1) 特定プロジェクトの推進

○実施項目②-1 丸森のシルクコアアトリエと生業の自立連携

＋実施項目⑤-1 上記にかかる課題解決ワークショップと理論化

〈成果と判明した課題〉

＊成果：多世代、異分野の人々が共同する場と機会を提供できた。

＊課題：多様なづくり手に対し、つなぎ手は中核である阿部倫子氏と少人数の協力者に限定されており、より結びつきの深い共創、製品づくりに

は、より強いビジョンが必要であること。

○実施項目②-2 大崎の農・食をめぐる生業景の有機的連携

+実施項目⑤-2上記にかかる課題解決ワークショップと理論化

〈成果と判明した課題〉

*成果：参照に値する取り組み、プレイヤーが多いことから、研究、考察に資する視察を重ねることができた。

*課題：本P Jが先導するような実践活動には至っていないため、内在する本質的課題の全貌に肉薄できていない可能性があること。また、大崎市のみならず、広域合併したエリアでの「地域」に関する領域感について、再考の必要があること（例：鳴子・岩出山・古川・三本木の異質性と連携可能性）。

○実施項目②-3 陸前の住文化を伝えるスレート千軒講

+実施項目⑤-3上記にかかる課題解決ワークショップと理論化

〈成果と判明した課題〉

*成果：広域に分布する重要拠点ごとの地域性を把握すると同時に、資源、技術者、住まい手といった要素の全てが完備した地区はないために、相補的な取り組みの意義や方向性を見出しつつあること。

*課題：広域ゆえに一体的な活動の企画はやや困難である一方、深い取り組みを全地区で行うことも不可能であり、各地のプレイヤー育成を本格化させる必要があること。また、同様な関心をもつ建築士ら技術者への情報共有を進めるなど、スレート千軒講+アカデミーの活動をより開かれたものとしていくこと。

◆今年度の到達点(2) データベース・学習ツール・モデル開発

○実施項目① 地技データベースの構築

+実施項目③ アトリエと共同に関する基礎概念検討と生業景の比較調査

〈成果と判明した課題〉

*成果：多様な事例を参照し、議論を重ね、1-4に示したようなアトリエのモデル化がまとまりつつあること。

*課題：コアトリエの「コ（共創）」に多様な様態がみられることを把握しつつあるが、まだ明文化・モデル化に至っていないこと。

○実施項目④-3 地技をとりまく地域資源クエストの開発（宮城大）

〈成果と判明した課題〉

*成果：本P Jが主題とする内容が、ともすればマニアックな方向に進みがちなことに鑑みて、地域資源学習の導入学習ツールを開発し、実装的な検証を行って、インターフェースを整えたWEBツールとしていちおうの完成に至ったこと。

*課題：開発したツール、その使い方や用語は、かなりWEBデザイン領域に偏っている印象もあり、若者にはある程度なじめるが、地技の体現者たる高齢世代には通じにくいツールとなっていること（ただし想定している中心ユーザーは若手なので、問題はないと考えている）。

◆今年度の到達点(3) サミット&マルシェの開催

○実施項目④-1：季刊コアトリエ/WEBの編集と発信

〈成果と判明した課題〉

＊成果：第8号まで発刊し、最終年度の2巻をもって全10巻を発刊することで、紆余曲折を重ねながらも目標に近づこうとしている歩みが記録できていること。また、コンセプトに共感できる人々に訴えるビジュアルデザインに一定の質を付与できており、研究期間終了後も漸進的に波及できるようなツールとして成立しうるものになっていること。

＊課題：本P Jの関心事がひろく、見方によっては何がテーマか分かりにくい面があること。

○実施項目④-2：コアトリエサミットの開催とアトリエ連携の推進

〈成果と判明した課題〉

＊成果：まったく異なる分野の様々な取り組みを一堂に集めたことにより、研究開発P Jの多面性や多義性を当事者間で共有できたこと。また、そこでのゆるやかな知遇が、少しずつ以降も広がっていること。

＊課題：天候が優れず集客が不足していたこと。日常的な発信が足りないこと。より明確なメッセージを、分かりやすく伝えるための工夫がまだ不足していること。

◆今年度の到達点(4) 論文等の執筆公開

〈成果と判明した課題〉

＊成果：景観、市場、学習ツールなど、報告できる内容についてはなるべく小まめに学会報告などを重ねていること。

＊課題：研究開発プロジェクトそのものをきちんと学術論文等に著すには至っていないこと。アトリエ群の分析が途上にあること。

◆その他の到達点など

〈成果と判明した課題〉

(a) 成果：サミット&マルシェ総括座談会の登壇者・江頭宏昌山形大学教授の紹介により、イタリアで生活文化研修プログラムを普及運営している教育事業社G E Nの今年度テーマ「土」をめぐる、東北各地を訪れるツアーが生まれ、仙台にて会談を行った（写真31）。衣食住を超えて地域の素材に着目するとらえ方は本P Jと通じるものがあり、その意義を再認識した。／課題：国際的な場になるほど、論理の明快さが求められることから、研究の理論化が急務である。

(b) 協力・参画：仙台市内にて、アート系のコアトリエともいえるべき「スタジオ開墾」が設立された（写真32）。仙台市卸町の巨大な倉庫をシェアアトリエとするものであり、本P Jではスレート千軒講の一拠点とすべく安価で借用し、主催者らの構想などに耳を傾けている。参照すべき一例になるものと思われる。

(c) 協力・参画：サミット&マルシェも聴講した宮城県石巻市稲井地区の稲井石材商工業協同組合より、大沼に対し、市発注の慰霊碑等設置業務

へのプロポーザルコンペへのデザイン協力依頼があった。これに応えたところ当選となり、その設計・建設に対し、他の協力者とともに全面的に協力を行い、完成にこぎ着けた（写真33）。本作は本P Jの直接の成果ではないものの、地技をもつ人々の力を結集して作品、そして風景を共創したという点で関連成果の一つに数えても良いものと考えられる。

(d) 執筆：特定P J・スレート千軒講の取り組みや、これに至る建築史研究の経過について、共同実施者の菅原が編集当局との仲立ちを行い、専門誌の連載が決まった。平成30年度末現在で第2号までが発刊となっており、全11回の予定となっている。本P Jの紹介は最終回を予定している。



写真31 イタリアの取組と情報共有



写真32 共同スタジオの動き(仙台)



写真33 稲井石材協同組合からのデザイン相談に対して
代表者大沼が全面的支援を行った石巻市牡鹿地区慰霊碑等設置業務



図16 スレート千軒講の取り組み等を契機として依頼を受け連載が始まった
会誌建築士（月刊専門誌）への寄稿（大沼・阿部）

（3）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

平成30年度は、情報収集・実践の方向性がより明確に定まった1年であり、その契機はサミット&マルシェであった。理想からいえば、ブレのない活動方針や明確な発信テーマが先にあり、これを広める機会としてサミットを開催すべきであったかもしれない。だが、当初より構想していたサミットの趣旨は、集う人々同士の意思疎通が第一義であったから、マタギや茅葺きやクルミ拾い、といった超個性派が集うこの機会において、それぞれの発言を丁寧に拾い上げることができたことは、意義深いことであったと考えている。もちろん、集客の少なさは大変反省するところであり、どのように一般市民に語りかけるかという視点が不足していることは否めない。この点からいえば、共同実施者である佐々木らが進めてきた導入学習ツール「地域資源クエスト」は、この問題を補うツールであったともいえよう。

その後、具体的な共創案件として、上記の慰霊碑の設計相談も舞い込んだことから、P J全体としては遅れ気味になった面がある。ただ、地元の素材を活かす地技の共創を直接相談され、建築家でもある代表者が背を向けることはやはり考えられないし、それによって地元の石材産業の歩みと今後の可能性について熟考できた点は、本P Jとしても一定の意義があったと考えている。

いずれにせよ、中心課題であるアトリエ情報の集約方針が定まり、最終年度に行う補足調査計画を明確化できたことは大きく、目標達成に向けていっそう尽力していく所存である。

2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

研究開発成果として、まずはそれぞれの特定P Jを実装に結びつける必要があり、そのための環境整備の一環として、平成30年度末、奇遇にも代表者の所属大学にて「プロジェクト研究所設置」の募集が始まったことから、「生業景デザイン研究所」として応募し、採択の運びとなった。従って研究期間終了後は、同研究所として引き続き特定P Jを進める、関係地域との連携をとるなどの後継事業を継続していく。

また、最終年度にかけて制作していくものとして、「とうほくアトリエカタログ&マップ」がある。これは、一連の取り組みで得られた情報および論をもとに再構成した半公開型のデータベースである。半公開とする意味は、無関係の第三者からの個人情報の特定を防いだり、趣旨を理解した人々に情報を限定したりする意図がある。また、このカタログ&マップをある主のマッチングシステムとする方法も検討したが、上述の報告に採り上げた事例から考えても、これはあまり有効でないだろう、との帰結に至った。本P Jで敬意をもって採り上げている「地技」の多くがデジタル技術とは対局にあることを考えると、将来世代においてA I技術が共創パートナーになることはあっても、共創のマッチング自体をA Iに預けることは、望ましくないと考えられるからである。あくまで「つくり手」「つなぎ手」「つかい手」「ささえ手」の各立場から、このツールを参照しつつ、真の共創に至る際にはフェイス・トゥ・フェイスで事を進めるべきであろう、と考えている。

また、季刊コアトリエの編集で得たコンテンツ、これを加工したWEB、そして地域資源クエストなどの開発ツールは、いずれも成果の一端をなすものとして、一般の閲覧利用に供し、関心層の拡大に寄与させていく予定としている。

3. 研究開発実施体制

(1) MNG：研究開発マネジメント(MN)グループ

①リーダー：大沼正寛(東北工業大学大学院ライフデザイン学研究科、教授)

②実施項目

実施項目① 地技データベースの構築

実施項目② 特定プロジェクトの推進

- 1 丸森のシルクコアトリエと生業の自立連携
- 2 大崎の農・食をめぐる生業景の有機的連携
- 3 陸前の住文化を伝えるスレート千軒講

実施項目③ アトリエと共同に関する基礎概念検討と生業景をめぐる比較調査

実施項目④ 記録・会談・発信

- 1 季刊コアトリエ/WEBの編集と発信
- 2 コアトリエサミットの開催とアトリエ連携の推進

実施項目⑤ 課題解決ワークショップと理論化

実施項目⑥ コアトリエの理論・モデル提示とアウトプット

- 1 オープンラボと特定P J+制作ツールによる後継活動計画
- 2 とうほくアトリエカタログ&マップによる地技と生業景の例示
- 3 地域資源クエストおよび既存ツールを用いた関心層の拡大化

(2) CAG：農山漁村共同アトリエ（CA）群調査グループ

①佐々木秀之（宮城大学事業構想学群、准教授）

実施項目① 地技データベースの構築

実施項目② 特定プロジェクトの推進

-1 丸森のシルクコアトリエと生業の自立連携

-2 大崎の農・食をめぐる生業景の有機的連携

実施項目③ アトリエと共同に関する基礎概念検討と生業景をめぐる比較調査

実施項目④ 記録・会談・発信

-2 コアトリエサミットの開催とアトリエ連携の推進

-3 地技をとりまく地域資源クエストの開発

実施項目⑤ 課題解決ワークショップと理論化

実施項目⑥ コアトリエの理論・モデル提示とアウトプット

-1 オープンラボと特定PJ＋制作ツールによる後継活動計画

-2 とうほくアトリエカタログ&マップによる地技と生業景の例示

-3 地域資源クエストおよび既存ツールを用いた関心層の拡大化

(3) LSG：生活景醸成（LS）と環境デザイン調査グループ

①竹内泰（東北工業大学大学院工学研究科、准教授）

②実施項目

実施項目① 地技データベースの構築

実施項目② 特定プロジェクトの推進

-3 陸前の住文化を伝えるスレート千軒講

実施項目③ アトリエと共同に関する基礎概念検討と生業景をめぐる比較調査

実施項目④ 記録・会談・発信

-1 季刊コアトリエ/WEBの編集と発信

-2 コアトリエサミットの開催とアトリエ連携の推進

実施項目⑤ 課題解決ワークショップと理論化

実施項目⑥ コアトリエの理論・モデル提示とアウトプット

-1 オープンラボと特定PJ＋制作ツールによる後継活動計画

-2 とうほくアトリエカタログ&マップによる地技と生業景の例示

4. 研究開発実施者

MNG：研究開発マネジメント（MN）グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
○大沼 正寛	オオヌマ マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究科	教授
宮本 愛	ミヤモト アイ	東北工業大学		研究支援コーディネーター
渡邊 博一	ワタナベ ヒロカズ	東北工業大学		研究支援コーディネーター

CAG：農山漁村共同アトリエ（CA）群調査グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
○佐々木 秀之	ササキ ヒデユキ	宮城大学	事業構想学群	准教授
菅原 香織	スガワラ カオリ	秋田公立美術大学	美術学部	准教授
大沼 正寛	オオヌマ マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究科	教授
宮本 愛	ミヤモト アイ	東北工業大学		研究支援コーディネーター
渡邊 博一	ワタナベ ヒロカズ	東北工業大学		研究支援コーディネーター

LSG：生活景醸成（LS）と環境デザイン調査グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
○竹内 泰	タケウチ ヤスシ	東北工業大学	大学院工学研究科	准教授
阿部 正	アベ タダシ	東北工業大学		研究支援コーディネーター
大沼 正寛	オオヌマ マサヒロ	東北工業大学	大学院ライフデザイン学研究科	教授
菅原 香織	スガワラ カオリ	秋田公立美術大学	美術学部	准教授

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント

年月日	名 称	場 所	概要・反響など	参加人数
H30/8/11～8/12	丸森コアトリエ「夏展」	丸森町陽だまり工房	地元周辺、県内から	約 40 名
H30/9/1	コアトリエとうほくサミット&マルシェ	せんだいメディアアテーク+勾当台公園市民広場 LIVE+RALLY PARK.	東北一円から関係者が集い、情報共有・交換を行ったほか、日本建築学会大会のプレイベントとしても位置づけたことで近隣の市民が訪れた	約 150 名
H30/12/15～12/16	丸森コアトリエ「冬展」	丸森町陽だまり工房	地元周辺、県内から	約 30 名
H31/3/16	丸森コアトリエ「春展」	丸森町陽だまり工房	地元周辺、県内から	約 30 名

(2) 研究開発の一環として実施したイベント

年月日	名 称	場 所	概要・反響など	参加人数
H30/4/13	丸森コアトリエ会議 &域外者案内	丸森町陽だまり工房、石塚養蜂園、佐野地織保存会	宮城県内外からも参集	約 15 名
H30/6/29～6/30	スレート千軒講ワークショップ@雄勝	石巻市雄勝町大須地区集会所	住民、技術者、関心層ら、域外からも参集	約 15 名
H30/9/26	地域資源ジャーニーマップ実装ワークショップ（のち「クエスト」と改名）	宮城県丸森町	主に丸森町地域おこし協力隊員、教育局関係者が参集	約 25 名
H30/12/2	国選定石盤葺師佐々木信平氏による文化庁技能講習会への協力	宮城県登米市豊里町・信玄工房	宮城県内から新たな技術者らが参集	約 25 名
H31/3/9	茅葺き民家の保全と茅野の育成に関するワークショップへの協力	宮城県南三陸町入谷・ひころの里	宮城県内から参集	約 20 名

H31/3/16	スレート千軒講ワークショップ@雄勝	石巻市雄勝町大須地区集会所	住民、技術者、関心層ら、域外からも参集、陸前高田矢作からの住民チームも参加し、地域間連携の素地を形成	約 20 名
H31/3/23	登米町海老喜商店ディスプレイデザイン発表会への協力	宮城県登米市登米町	スレート葺きの旧店舗を改装する試みで、東北工業大学中村研の取り組み。当研究室は設計支援協力、その後にヘリテージマネージャー関係者と、今後のスレート千軒講の可能性について相談した	約 20 名

(3) 書籍・冊子等出版物、DVD等

- ・菅原香織（秋田公立美術大学）「東北の技、見つめなおす」東京新聞「SDGs 東北の未来へ」2018年9月18日朝刊
- ・季刊コアトリエ 6号、大沼PJ、東北工業大学、2018年8月、関係者へ配付・郵送（図6）
- ・季刊コアトリエ 7号、大沼PJ、東北工業大学、2018年12月、関係者へ配付・郵送（図7）
- ・季刊コアトリエ 8号、大沼PJ、東北工業大学、2019年3月、関係者へ配付・郵送（図8）
- ・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第1回 東京駅のスレート屋根をみつめながら」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.797, 2019年2月
- ・大沼正寛・阿部正「陸前地方の天然スレート建築 第2回 雄勝 -スレート産業の黎明」（公社）日本建築士会連合会『建築士』連載記事，Vol.68, No.798, 2019年3月（※直接のPJ紹介・注釈は上記2編では未だであり、第4回記事から（入校済み））

(4) ウェブメディアの開設・運営

- ・コアトリエ-この地に技ありプロジェクト、<http://co-atelier.jp>、2018年3月
- ・https://m.facebook.com/profile.php?id=1993796587552696&ref=content_filter
コアトリエ-この地に技ありプロジェクト、<http://co-atelier.jp>、2018年5月

(5) 学会（5-3.参照）以外のシンポジウム等への招待講演実施等

- ・なし

(6) その他の発信等

- ・ラジオ出演（大沼正寛）Date FM（FM仙台）「Hope for MIYAGI（MP:石垣のり

こ)」にて、サミット&マルシェの紹介，2018年8月27日（月）12:30~12:50

5-2. 論文発表

(1) 査読付き（ 0 件）

●国内誌（ 0 件）

●国際誌（ 0 件）

(2) 査読なし（ 6 件）

- ・阿部正，大沼正寛，竹内泰「陸前地方のスレート民家における産地周辺の保全状況とその特徴」日本建築学会東北支部研究報告集 計画系 第81号 B-13, pp91-92, 2018年6月
- ・佐々木悠里，大沼正寛「大崎市における凍り豆腐生産と生業景の保全について」日本建築学会東北支部研究報告集 計画系 第81号 B-14, pp93-94, 2018年6月
- ・木村一気，大沼正寛「東北地方における「手づくり市場」の運営概況」日本建築学会東北支部研究報告集 計画系 第81号 B-15, pp95-98, 2018年6月
- ・阿部正，大沼正寛，竹内泰「昭和30年代のスレート屋根替え民家についての考察」日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2分冊, pp37-38, 2018年9月
- ・佐々木秀之，菅原香織，宮本愛，大沼正寛「現代における市・マルシェの動向と地域資源ジャーニーマップを用いたソーシャルデザイン」日本建築学会大会学術講演梗概集 E-2分冊, pp139-140, 2018年9月
- ・佐々木秀之，菅原香織，宮本愛，田澤紘子，大沼正寛「地域資源ジャーニーマップの開発プロセスに関する考察」日本デザイン学会第1支部大会・第9回研究発表大会梗概集pp5-6, 2018年10月

5-3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

・なし

(2) 口頭発表（国内会議 6 件、国際会議 0 件）

- ・阿部正（ノーマルデザインアソシエイツ）「陸前地方のスレート民家における産地周辺の保全状況とその特徴」日本建築学会東北支部研究報告会，青森県観光物産館アスパム，2018年6月16日
- ・佐々木悠里（東北工業大学）「大崎市における凍り豆腐生産と生業景の保全について」日本建築学会東北支部研究報告会，青森県観光物産館アスパム，2018年6月16日
- ・木村一気（東北工業大学）「東北地方における「手づくり市場」の運営概況」日本建築学会東北支部研究報告会，青森県観光物産館アスパム，2018年6月16日
- ・阿部正（ノーマルデザインアソシエイツ）「昭和30年代のスレート屋根替え民家についての考察」日本建築学会大会，東北大学川内北キャンパス，2018年9月5日
- ・佐々木秀之，菅原香織，宮本愛，大沼正寛「現代における市・マルシェの動向と地域資源ジャーニーマップを用いたソーシャルデザイン」日本建築学会大会，東北大学川内北キャンパス，2018年9月6日
- ・佐々木秀之，菅原香織，宮本愛，田澤紘子，大沼正寛「地域資源ジャーニーマッ

プの開発プロセスに関する考察」日本デザイン学会第1支部大会，秋田大学，
2018年10月7日

- (3) ポスター発表（国内会議__0__件、国際会議__0__件）
・なし

5－4．新聞／TV報道・投稿、受賞等

- (1) 新聞報道・投稿（__0__件）

- (2) 受賞（__0__件）

- (3) その他（__0__件）

5－5．知財出願

- (1) 国内出願（__0__件）

- (2) 海外出願（__0__件）